

第1章 1987年度京都大学構内遺跡調査の概要

西川幸治 久馬一剛 清水芳裕 森下章司

1 調査の概要

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事の際には、当該部局の報告にもとづき、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。1987年度には、以下の発掘調査2件、試掘調査2件、立合調査6件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	農学部総合館東棟（第Ⅱ期）新営予定地（北部構内B D33区）	（第3章 図版1-180）
	工学部電気系学科校舎新営（本部構内A W27区）	（発掘中 図版1-181）
試掘調査	北部グラウンド改修工事（北部構内B H35区）	（第1章 図版1-182）
	理学部動植物学教室新営（北部構内B D28区）	（発掘中 図版1-183）
立合調査	病院精神科棟新営給排水その他工事（病院構内A H10区）	（図版1-184）
	農学部農学科実験温室取設工事（北部構内B I28区）	（図版1-185）
	病院地区基幹整備工事排水管埋設（病院構内A H20区）	（図版1-186）
	吉田キャンパス情報ネットワーク施設整備工事（北部構内B A29区）	（図版1-187）
	吉田キャンパス情報ネットワーク施設整備工事（本部構内A T25区）	（第1章 図版1-188）
	本部構内身障者用通路柵その他取設工事（本部構内A U24区）	（図版1-189）
資料整理	放射線同位元素総合センター 有機廃液処理設備室新営予定地（医学部構内A L20区）	（第2章 図版1-169）

2 調査の成果

前節で記載した調査のうち、1987年度に整理を終えた9件について、その成果を略述する。なお、北部構内B H35区の試掘調査については本章第3節で、また、個々の発掘調査については第2章以下で詳述する。

縄文晩期の遺構 北部構内B D33区において、縄文晩期の土坑3基を検出した。うち1基は滋賀里Ⅳ式の良好な一括資料であり、近畿地方縄文土器編年の重要な資料となるものである。北白川扇状地上に営まれた縄文時代の集落は、時期によって少しずつ場所を移動させていたことが指摘されている。調査区一帯が縄文晩期後半において生活の中心地であったことがうかがわれた（第3章参照）。

铸造関係遺物 医学部構内A L20区の土取り穴から、平安後期のものと思われる六器、器台などの密教法具の鋳型や取瓶が出土した。従来の調査で教養部構内A P22区、医学部構内A N18区、病院構内A J19区において梵鐘鋳造遺構や鋳型、坩堝、鑪の羽口等が検出され、この地が古代・中世の鋳造に関わる工人集団の一本拠地であったことが明らかとなりつつある。今回の調査の出土品は、この集団が梵鐘や鏡に加えて、仏器など幅広い製品の鋳造に関わっていたことを示している。さらに、この近辺に存在し、文献から密教法具の用いられていたことが知られる福勝院との関連も注目されよう（第2章参照）。

近世土取り穴 医学部構内A L20区で江戸前期の土取り穴を検出した。周辺では中世から近世におよぶ土取り穴が広く検出されており、この一帯で場所を移動させながら継続的に土取りのおこなわれていたことが明らかとなった（第2章参照）。

尾張藩邸堀 本部構内A T25区の立会調査で、東西方向の堀を検出した(図版1-188)。A T27区検出の幕末～明治初頭の尾張藩邸堀[五十川81]に続くものと考えられる。

3 北部構内B H35区の試掘調査

北部グラウンド改修工事が計画されたため、発掘調査に先立って試掘調査をおこなうことになり、学生部の協力を得て実施した。本調査地点を含む北部構内は、北白川追分町遺跡に含まれる西日本の著名な縄文時代遺跡として古くから知られている。1973年度におこな

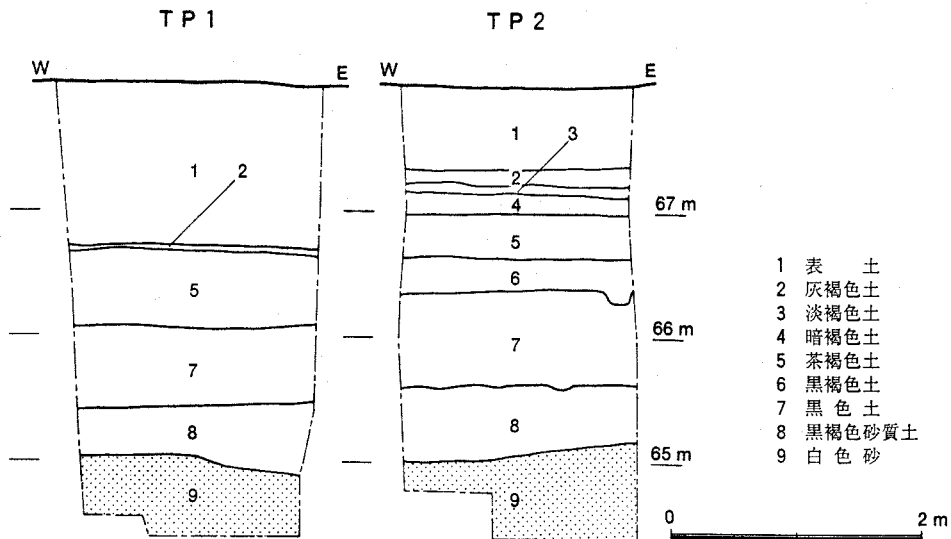


図1 TP1・TP2の層位 縮尺1/60

北部構内B H35区の試掘調査

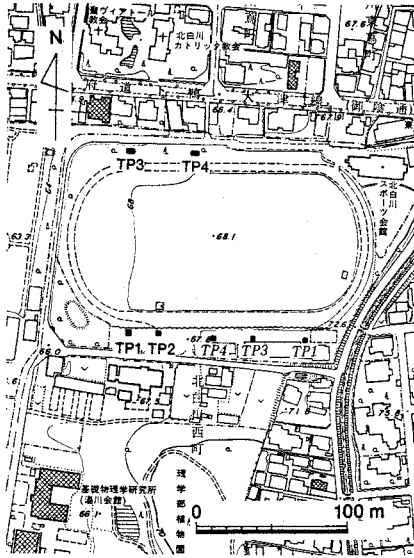


図2 試掘調査位置 縮尺1/5000

った理学部ノートバイオトロン装置室新営予定地内の調査では縄文後期の甕棺をともなる配石墓群〔中村74b〕, また1982年度の北部構内B F 33区の調査では, 縄文中期の堅穴住居跡が2棟発見されている〔清水84〕。いずれも北白川追分町縄文時代遺跡の重要性を示す遺構として, 前者は, 植物園内に移築し, 後者は現地で埋め戻して保存されている。

試掘地点周辺は北白川扇状地の端部にあり, 東から西へ向けて急に下がる地形をなしており, 東半は削平されていることが現地形と1979年におこなった北白川合宿研究所新営予定地の試掘調査から明らかになっていた〔岡田ほか 80 pp.31-2〕。

グランド東半部層位は図3に示すように基盤の白砂及び礫層が急激に下がり, 旧地形の状況をよく表わしている。第5層では縄文土器とともに平安時代の遺物を, 第3・4層では室町時代の遺物を主として含むことが明らかになっており, 東端部の TP1 ではこのうち第3層のすべてと第4層の一部が削平されていることが明らかになった。

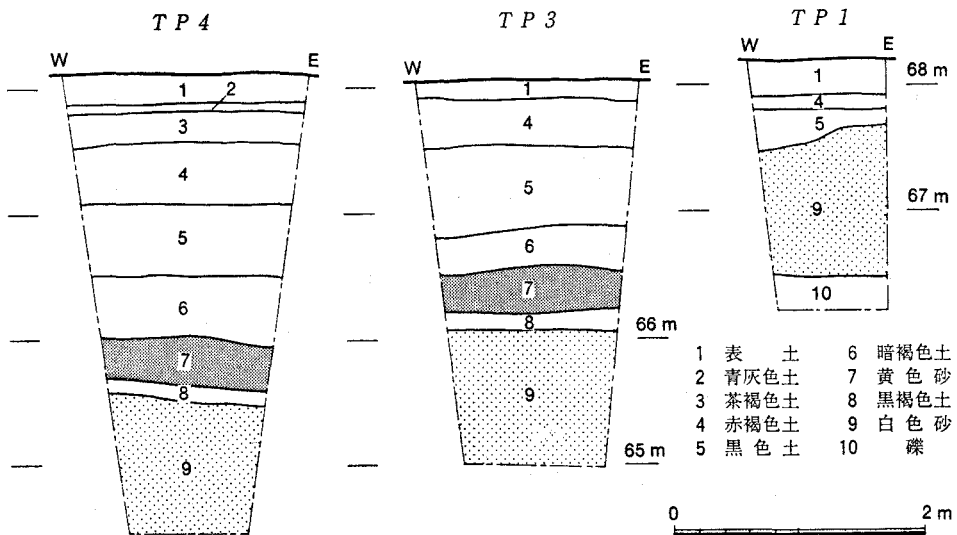


図3 TP4・TP3・TP1 の層位 (1979年度の試掘調査) 縮尺1/60

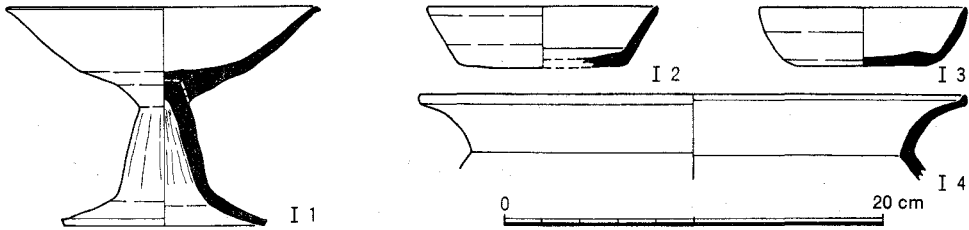


図4 TP1 黒色土出土遺物(I1・I4土師器, I2須恵器), TP3 表土出土遺物(I3須恵器)

このたびの試掘調査は、改修工事がグラウンド全域にわたるため、遺物包含層の存否が不明な西半部を中心としておこなったものである。4 m × 2 m と 2 m × 2 m のそれぞれ 2 ケ所計 4 ケ所の試掘坑を設けて層位と出土遺物の確認をおこなった(図2)。グラウンド西半部にあたる 4 ケ所の試掘坑の基本的な層位は、上から表土(第1層)、茶褐色土(第5層)、黒色土(第7層)、白色砂(第9層)である(図1)。一方、TP3, TP4ではこれらの層はいずれも約 1 m 低い位置にあり、表土が厚く覆う。

今回の西半部と、1979年度の東半部の調査結果からグラウンド全域にわたる旧地形と遺物包含層の関係は以下のように復原できる。両者で共通する層は西半の第7層と東半の第5層にあたる黒色土と、第9層の白色砂である。これらはいずれもグラウンド東端部にあたる TP1 と TP3 の間で急激に下がり、西半部へ向かって緩やかに傾斜をもつ。さらに TP3・TP4のある西北部では西へと同時に北へ向かって急激に下がることが認められている。こうした各層の堆積はグラウンドをとりまく周辺の現地形によく反映されており、現在のグラウンド面は、東端部で一部旧地形を削平し、西半部では西および北西へ傾斜する地形上に盛土を施して平坦面を作り出していることがわかる。遺物包含層は東半部で一部削平を受けているが、ほぼ全域にわたって残っていることが明らかになった。

遺物はTP1 第7層から奈良時代の土師器や須恵器がまとまって出土し、TP3 表土からも同時期の須恵器が出土している(図4)。I1は土師器高杯で脚台柱状部外面は削りののちに撫でが施されて面取りは明瞭でない。また内面には絞目が残る。I2は口縁部にまっすぐ立ち上がる須恵器杯で底部の篋切り痕は明瞭でない。I3はやや内湾する口縁部をもつ須恵器杯である。I4は土師器鍋で外面には刷毛目が残る。本部構内A T27区の奈良時代の竪穴住居跡S B1で同種の鍋が出土している〔五十川81p.30〕。

以上のように1979年度と今回の試掘調査から、グラウンド全域にわたって縄文時代から中世にわたる遺物が出土することがわかり、さらに奈良時代から平安時代の遺物包含層がほぼ全域にわたって良好に残っていることが明らかになった。